

ただ幸せになりたかったけど、
あなたたちは言うけれど

Characters

ジェラルド

レダル公爵家の嫡子で
ジュリアンの従兄。
ジュリアンを慈しみ
兄のように守っている。

マゼンタ

イフリア公爵の後妻。
過去、嫉妬のあまり
ジュリアンを
殺害しようとした。

サミュエル

軽薄な第二王子。
ジュリアンの
婚約者だったが
既に白紙になっている。

シュゼット

マゼンタの娘で、
ジュリアンの異母妹。
考えが浅く我儘な令嬢。

ジュリアン

イフリア公爵家の長女。
幼い頃、父の愛人に
殺されかけて
トラウマを抱えながらも
親戚のもとで育った。

アドルフ

優秀な第一王子。
国内の貴族の
派閥争いを止めるため
画策しているようで……

レイモン

イフリア公爵家の長男で
ジュリアンの実の兄。
幼い頃に別れた妹を
ずっと気にかけていた。

1 プロローグ

窓の外から子ども達が侍女と遊んでいる声が聞こえてくる。楽しそうに追いかけてこしているらしい。体力がついてきた子ども達に侍女が振り回されて困っているようだけど、きつとこの子を見たら夢中になって相手をするに違いない。

「ふふっ。きつと喜ぶわね」

膝の上に乗せた子猫が返事をするように小さく「やあと鳴いた。親猫と離しても大丈夫なほど育った茶色の猫はようやくこの部屋に慣れてきたのか、きよろきよるとあたりを見回すと膝から飛び降りた。

「え？ 下りたかったの？」

膝の上から下りて痛くないのかと思ったけれど、子猫はあちこちに飛び回る。ずいぶんと元気な猫のようだ。

侍女と笑い合いながら見ていたら、ドアが開いた。

あ、外に出ていってしまう。そう思ったけれど、ひょいと捕まえられてこちらに連れてこられる。背の高い夫に捕まった子猫は不服そうに小さく唸った。

「これが今朝言っていた猫？」

「ええ、可愛いでしょう？ あの子達も気に入るわね」

再び私の膝の上に乗せられた子猫を撫でると気持ちよさそうに伸びる。動き回ったから眠くなったのかもしれない。

「気持ちよさそうだね、俺も撫でようかな」

「ええ、どうぞ」

子猫を撫でると思ったのに、なぜか猫ではなく私の金色の髪にふれた。せっかく綺麗に結い上げられているのに、さりとほどこかれてしまう。そのまま背中まである髪をくると指に絡ませるようになった後、うれしそうに撫でている。

「どうして私を撫でるの？」

「俺は猫よりもジュリアンヌのほうを撫でたいから」

「もう」

「こうして髪にふれていると幸せだって感じるんだ」

そんな風に微笑まれたら、もう何も言えなくなって身を任せるしかない。そもそも夫に髪を撫でられるのは嫌いじゃないのだし。

ふと手が髪から離れたと思ったら、そつと頬に添えられて唇が重なる。手を伸ばすと子猫ごと抱き上げられて、また唇が重なった。

ああ、なんて幸せなんだろう。こんな幸せな日が来るなんて、あの頃は思いもしなかったのに。

2 二人の兄様

馬車の用意ができたと侍女に告げられて、お母様と一緒に部屋から出る。離れの前に停められた馬車に乗り込む時、母屋がちらりと見えた。私が一度も行ったことがない母屋には兄が暮らしている。

「兄様も一緒に行ければいいのに」

「そうね。でも、レイモンも頑張っているのだから」

「はい……」

兄のレイモンは今年十三歳になった。嫡子教育のため、八歳から母屋で暮らしている。その時、私は五歳になる少し前だった。兄様のことが大好きだった私は別々に暮らすのが嫌で大泣きしたけれど、お母様にもどうにもできなかったらしい。よほど嫡子教育が忙しいのか、それから兄様と会う機会はほとんどなかった。

私が生まれたイフリア公爵家はリヴァロイル国の二大公爵家のうちの一つで、伝統派と呼ばれる派閥の筆頭家だ。

伝統派というのは、この国に昔から住んでいる魔力を持たない貴族家のことだ。数代前に隣国の王女が嫁いできたことをきっかけに魔力を持つ貴族が増えたが、伝統派の貴族家は魔力を持つ者を

受け入れることはない。

先代の国王陛下は伝統派と推進派の仲の悪さを解消するため、伝統派と推進派の令嬢から一人ずつ選び、王太子の妃にさせた。

そして、それぞれの派閥の長を親戚関係にさせようと、イフリア公爵家にレドアル公爵家から娘を嫁がせた。その、レドアル公爵家から嫁いできた娘というのがお母様だ。

最後まで反対していたというレドアル公爵家のお祖父様は、娘を嫁がせる際に条件をつけた。それは月に一度レドアル公爵家に娘を帰すというものだ。

敵陣とも言える反対派閥の家に嫁がせるのだから、月に一度顔を合わせることで問題が起きていないかどうか確認したいという、無礼ともとれる申し出だった。

だが、敵対する家に嫁いだ娘が心配になるというのはもつともなこと。王家もイフリア公爵家もこれを認め、お母様は月に一度レドアル公爵家に帰ることになった。

兄様が生まれてからは兄様も一緒に、私が生まれてからは三人で帰っていたが、嫡子教育が始まって以来、兄様はお父様の許可なく外出できなくなってしまった。

伝統派を継ぐ嫡子が推進派の家に影響されたくないという考えからだと思うけれど、兄様と一緒にいる時間が奪われてしまった私は悲しいだけ。

それを慰めてくれたのは母方の従兄、レドアル公爵家の嫡子ジェラルド兄様だった。

レドアル公爵家の屋敷に馬車が着くと門の前で一度止まり、また動き出す。門をくぐった後、ゆつくりと速度を落とした馬車が完全に止まるとドアが開けられた。その向こうに立っていたジェ

ラルド兄様の肩まであるサラサラの銀髪がまぶしく光っている。

「こんにちは、叔母様、ジュリアンヌ」

「ジェラルド兄様！」

ドアを開けてくれた兄様にそのまま抱きつくと、しっかりと受け止めて馬車から降りしてくれる。

「あらあら、お転婆ね。騒がしくてごめんなさいね」

「いえ、大丈夫です。なついてくれていると思えば可愛いです」

「それならいいけれど、今日は天気もいいし中庭かしら」

「はい。母上が準備をしています」

案内してくれるジェラルド兄様と手をつないで中庭へ向かう。大きな布が張られた下にはテーブルと椅子が用意され、伯母様が両手を広げて待っていた。

「ジュリアンヌ、いらつしやい！」

「伯母様、こんにちは！」

駆け寄るとすぐに抱きしめてくれる。お母様とも違う香水の匂いは優しい。

「この前ジュリアンヌが美味しいと言っていたマドレーヌも焼いてあるわ」

「うれしい！ 伯母様、ありがとう！」

レドアル公爵家には兄様しかいないため、女の子が欲しかった伯母様にはまるで娘のように可愛がってもらっている。伯父様も優しく、レドアル公爵家はもう一つの私の家のような。

伯母様とお母様が難しい話をしている間は、兄様とお菓子を食べ待っている。そのうち飽きて

しまったら、兄様と中庭で遊び始めることもある。

そろそろ落ち着いて話を聞けるようになりなさいとお母様に注意を受けたこともあり、この日はちゃんと座って話を聞いていた。

「そういえば王宮のお茶会に呼ばれたのですって？」

「ええ、そうなの。第二王子と会わせたいからって」

「まあ、ジュリアンヌを？」

第二王子と聞こえて、思わず顔をしかめてしまう。それに気がついた兄様が私の両頬に手を添えた。

「どうかしたの？ そんな顔して」

「……うん」

第二王子のサミュエル様は癖のある金髪で青い目をした、身体の大きな王子だった。普通にお茶会で同席しただけなら嫌にならなかったけれど、どう説明したらいいのか。貴族令嬢が人前で王族の悪口を言うなんて、お母様に叱られるかもしれない。黙っていたら、それに気がついたお母様が苦笑いで説明してくれた。

「ジュリアンヌは第二王子が苦手みたいなの」

「何かあったんですか？」

「それがね、どうして母親と髪の色が違うんだって、髪を引っ張られたみたいなのよ」

「そんなことを第二王子が？ ジュリアンヌの髪はイフリア公爵家の色なの？」

「第二王子が側妃に甘やかされて育ったというのは本当なのね」

兄様と伯母様も呆れているが、私だって突然髪を引っ張られて驚いたし、悲しかった。私もお母様や伯母様、兄様と同じ銀色の髪で生まれたかった。

第二王子は自分と同じ金髪だなんて生意気だとも言っていた。でも、私がこの色を選んだわけじゃないのに、怒られてもどうしようもない。お父様と同じ色だから仕方ないけれど、選べるなら絶対に銀色にしていた。

その時のことを思い出すとまだ泣きそうになる。

「ジュリアンヌの髪を引っ張るなんて、許せないな。こんなに綺麗な髪なのに」

いつもより低い声に顔を上げてみれば、珍しくジェラルド兄様が怒っているのがわかった。

優しく髪を撫でられ、悲しかった気持ちが少しずつおさまっていく。こうして会うたびに褒めてくれるから、髪の手入れはきちんとしていた。だからこそ、否定されて嫌な気持ちになったんだと思う。

そんな私達をお母様はうれしそうに見ていたけれど、伯母様は頭が痛い時のようにこめかみを押していた。

「幼いとは思っていたけれど、王家は何をしているのかしら。ジェラルドと同じ年だとは思えないわ」

「え？ 第二王子は兄様と同じ年なの？」

「そうだよ。何度かお茶会で会ったことはあるけど、俺とは話が合わなくて仲良くできたことはない」

いな」

それはなんとなくわかる気がする。いつも落ち着いて穏やかなジェラルド兄様とはまったく違う。第二王子は騒がしくて落ち着きがなくて、人に暴力をふるうことをためらわない気がした。

「他にも何かされたのか？」

「……ぶさいくだって。レイモン兄様のほうが美人だって」

「は？　なんてことを言うんだ。ジュリアンヌは可愛いよ。きっと叔母様みたいな美人になるよ」

「本当？　お母様みたいに綺麗になれる？」

「もちろん」

ジェラルド兄様が本気でそう言ってくれているのがわかってうれしくなる。兄様がそう言うのなら、第二王子のことなんてどうでもよくなってしまった。

「あ、ジュリアンヌに渡したいものがあつたんだ。一緒に取りに行ってくれる？」

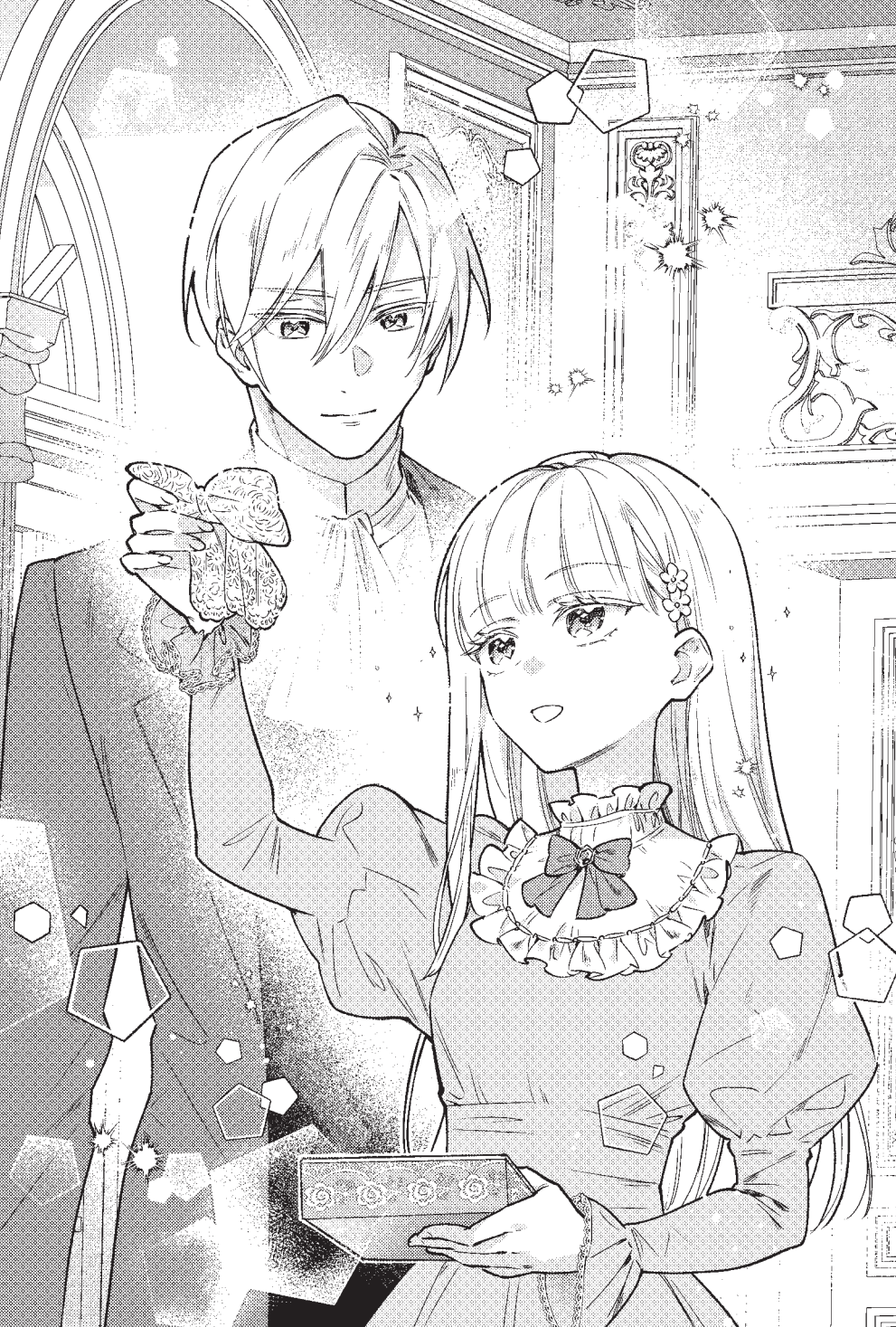
「ええ、いいわ」

私に渡したいものってなんだろう。兄様に手を引かれて屋敷の中に入る。どうやら兄様の部屋に向かっているらしい。部屋に入ると、引き出しの中から箱を取り出した。

「これを渡そうと思って。もうすぐ誕生日だろう？」

「わあ、ありがとう！」

開けてみると中にはレースの白いリボンが入っていた。花が浮かび上がるようになっていて、見たことがない編み方。手に取って目に透かしてみる。



「すごく綺麗！　ありがとう！」

「結んでみればいい」

兄様が侍女に命じて私の髪に結んでくれる。耳の少し上にリボンを結ぶと、髪にレースがかつてとても可愛い。

「すごくよく似合っているよ」

「兄様、このリボン大事にするわ」

「大事にするのはいいけど、ちゃんと使ってほしいな。ダメになったらまた新しいリボンを贈るから」

「え？　でも」

「普段から使ってほしいんだ。俺がいつでもジュリアンヌのそばにいられるわけじゃない。寂しくなった時に俺を思い出せるようにいつも使っていてほしいんだ」

「兄様……わかったわ。毎日使うことにする。本当にありがとう」

レイモン兄様に会えなくなつて、ジェラルド兄様にもいつも会えるわけじゃない。私がさみしがっているのに気づいたからこのリボンを贈ってくれたらしい。鏡で見なくても、このリボンにふれたらジェラルド兄様のことを思い出せる。

中庭に戻つてお母様達に見せたら、とても似合うと言ってもらえた。

「ふふ。ジュリアンヌにあげたいからつて、特別に作らせたもののよ」

「母上、それは内緒にしてくださいって言ったのに」

「あら、そうだったかしら。ごめんなさい」

見たことがない編み方だったのは、ジェラルド兄様が特別に作らせたものだからみたい。でも、そんなことをしてもらわなくても、このリボンは特別なものだった。いつでも兄様のことを大事に思つてもいい、そう言ってもらえた気がした。

それからすぐに私は十歳の誕生日を迎えたけれど、特別なことはない。他の令嬢のように誕生日祝いに何かされることもなかった。でも、お母様にお祝いを言ってもらえるだけでうれしい。そう思っていたけれど、この日は違った。

お父様が夕食を一緒にとるために離れに来るという。普段会うこともないお父様に会えるなんて緊張する。

夕食時、屋敷の主人がいるからか、使用人達も緊張しているように見える。普段とは違う雰囲気の中、食事が始まる。

特に会話もなく食事が進み、もうすぐ終わりになるという頃、突然お父様に話しかけられた。

「ジュリアンヌは十歳になったのだったな」

「はい」

「もう話がわかる年だろう。王家から話が来たので受けた。第二王子の婚約者にしたいそうだ」

「あなた！　その話を受けたのですか！　私は断ったほうがいいと」

「うるさい！　仕方ないだろう。伝統派から王太子を出すにはそれしかないんだ！」

「そんな……ジュリアンヌの気持ちはどうなるのですか!」

「そんなことは知らない。……政略結婚は貴族の務めだろう」

「……断れないのですか」

「もう話は終わっている。次のお茶会の後で署名したいそうだ」

「……わかりました」

話を理解できないままにお父様とお母様の会話が終わる。

……え? 第二王子の婚約者? 私のことが大嫌いな第二王子と結婚しなくちゃいけないの?

信じられなくて、お父様を見る。だけど、お父様は私のことは一度も見ず、食事が終わると帰っていった。

「ジュリアンヌ、大丈夫?」

「……お母様、どういうこと?」

「あのね、ジュリアンヌが第二王子の婚約者に内定してしまったみたい」

「それって、私が第二王子と結婚するってことだよな?」

「ええ、そうね」

だんだん理解してきたら、受け入れられないことに気づいた。

「嫌よ! あの王子と結婚なんてできない!!」

大きな声を出したからか、お母様の眉尻が下がる。令嬢としてやってはいけないことだったのかもしれないけれど、それでも我慢できなかった。

「」

「嫌、嫌よ。だって、私の髪色が気に入らないって引つ張って、レイモン兄様のほうが綺麗だって言うような王子なのよ。絶対に仲良くできないわ」

言えと言えど無理だって思えて、苦しくて涙があふれてくる。泣きじゃくっていたら、お母様に抱きしめられた。

「そうよね。急にそんなこと言われても嫌だって思うわよね。……お母様もね、そうだったの。仲良くもないお父様と結婚しなさいって国王陛下に命じられて……すごく嫌だった」

「……お母様も嫌だったの?」

「ええ、お母様には他に結婚したかった人がいたの。お父様にもいたわ。だから、上手くいくわけがないと思った」

その人を思い出したのか、お母様が悲しそうな顔になる。いつも穏やかに笑っているお母様にそんなことがあったなんて知らなかった。

「でもね、今は後悔していないの。だって、レイモンとジュリアンヌに出会えたんだもの」

「兄様と私?」

「ええ、そうよ。ヴィクトルと結婚していなかったら、二人を産むことはなかったもの」
まるで宝物のように抱きしめられて、涙が止まった。

「だからね、今は嫌でも、いつかは良かったと思えるかもしれないわ」

「お母様、本当に?」

「ええ、きつとね」

そうなのかな。第二王子と結婚して良かったなんて、本当に思える日が来るのかな。うつむいたらリボンの端っこが見えてジェラルド兄様を思い出した。ずっと一緒にいたいのはジェラルド兄様なのに。どうして結婚相手がジェラルド兄様じゃないんだろう。

だけど、それ以上嫌だって言えばお母様を困らせるだけなんだってわかって、もう何も言えなかった。

王宮でのお茶会の日、行かなくちゃいけないのはわかっていたのに、お腹が痛くて起きられなかった。

「ジュリアンヌ、無理そうかしら？」

「……ごめんなさい、お母様」

こんなことで欠席なんてしたらお母様が叱られてしまうのはわかっていたのに、どうしても起き上がれない。お腹全体がキリキリと痛んで、じっとしてられないくらいつらい。こんな状態でドレスを着るなんて絶対に無理だった。

「仕方ないわね、お茶会にはヴィクトルとレイモンだけで行ってもらわ」

レイモン兄様には会いたかったけれど、お茶会に行かなくていいと決まって少し身体が楽になる。王宮に行きたくない、第二王子に会いたくない、そう思っていたからお腹が痛くなったのだとわかってしまう。

どうしよう。ちゃんと公爵令嬢らしくしなくちゃダメなのに。

結局、一日中起きることはできなかった。次の日も食事ができないほどつらかったからか、お母様はゆっくり休んでいいわと言っていた。

お茶会から三日して、私はようやくいつも通りの生活に戻っていた。あんなにお腹が痛かったのに、今は嘘のようになんともない。お茶会の後で婚約の署名をすと言っていたのはどうなったんだろう。特に何も知らされていないけれど、私から聞くのも嫌だったので何も言わなかった。

昼過ぎになって、母屋から家令が来て静かな離れがざわつき出した。慌ただしく何かを準備している侍女のロマを捕まえて聞き出す。

「何かあったの？」

「レイモン様が熱を出したそうですが、薬では下がらないと。公爵様がロズリーヌ様をお呼びださうです」

「兄様が熱を？ お母様を呼んでいるの？」

「ええ。レイモン様は魔力なしとはいえず、ロズリーヌ様の血を引いていますから。何か特別な治療が必要なのかもしれないと思われているようです。たしかにロズリーヌ様ならレイモン様の治療ができるでしょう」

「そうね。お母様がついていればすぐに良くなるわよね」

そういうことなら邪魔をしてはいけない。お母様が母屋に行くのなら、侍女達もついていくはずだ。

母屋にはいろんな人がいる。魔力持ちであるお母様や侍女達のことを化け物扱いするような人もいる。公爵夫人のお母様が離れに追いやられているのはそのためだ。

だから、お母様が母屋に行く時には侍女が全員ついていく。集団でいれば傷つけようとする人がいても対応できるからだろうだ。

私は生まれてから一度も母屋に行ったことがない。お父様とは離れに來た時に会うけれど、抱き上げられたことはない。

魔力を持つて生まれたから嫌われているのだというのは、早いうちに理解していた。

とはいえ、離れに住んでいて困ることはなかった。お母様と侍女達が勉強を教えてくれるので家庭教師がいなくても困らない。このまま学園が始まる十三歳まで離れにいても、問題はない。そう思っていた。

バタバタとお母様と侍女達が母屋に向かった後、何もすることがなくソファに座って本を読む。

玄関のほうから人が入ってくる音がした時は、お母様達が戻ってきたのだと思っていた。

「へえ、あなたがジュリアンヌ？」

「……誰なの？」

ドアを開けて入ってきたのは知らない女性だった。黒髪に黒目。見たことはないけれど、とても綺麗な女性。だけど、淑女らしい微笑みはなく、私を睨みつけていた。

「知らないの？ 私を？」

「ええ、知らないわ。侍女には見えないけど」

派手なドレス姿を見て侍女だとは思わなかったけれど、どこかの夫人にも見えなかった。普通の

夫人が先触れもなく、お母様の許可なく入ってくるとは思えない。社交の経験はなくても、礼儀作法の授業は厳しく受けさせられていた。

「私が侍女？ 冗談じゃないわ。泥棒の娘は本当に失礼なのね！」

「泥棒ですって？」

「ええ、そうよ。ヴィクトルは私と結婚するはずだったのに、ロズリーヌのせいで結婚できなかったのよ！」

お父様と結婚するはずだった女性？ でも、そんなことを言われてもお父様とお母様の結婚は国王陛下が決めたという話だった。責めるのなら先代の国王陛下なのでは？ と思ったけれど、そんなことを言えば不敬になる。

「あなた達さえいなくなれば、今からだって遅くない……」

「……どうということ？」

にやりと笑った女性の顔が何かを企んで（たくら）いるようで、ここから逃げたほうがいいと本能的に感じた。立ち上がって逃げようとしたら、すぐに追いつかれて髪を掴まれる。ぎりぎり握りしめるように髪を引っ張られ、痛くて動けない。

「ふうん。綺麗な金髪ねえ。腹が立つわあ」

「痛いっ！ 離して！」

「うるさいわね。ジム、早くして」

「奥様……本当にやるんですか？」

「いいから、早くしなさい！ あなたも殺されたいの？」

「ひい……やりますって。……お嬢ちゃん、ごめんな」

大きな男性が女性の後ろから現れたと思ったら、大きな手で腕を掴まれる。抵抗しようとしたけれど、男性の力にはかなわなくて、押さえつけられたまま口に布を巻かれ担ぎ上げられた。

「！！！」

このままでは連れ去られると思い、大声を出して暴れようとした。でも、体格差がありすぎるし、口に布を巻かれているから助けを呼べない。ジタバタさせていた足も押さえられて運ばれてしまう。あつという間に母屋から見えない場所まで連れていかれて馬車に乗せられる。貴族用だと思われる馬車には先ほどの女性も一緒に乗っていた。

馬車の床に転がされた時に口に巻かれていた布はほどけて落ちた。だが、もう馬車は動き出してしまった。

「ふふふつ。これで、これでようやく邪魔者が消えるわ」

「……」

消える……私を殺す気なのかもしれない。お父様と結婚したかったのにできなかったことは可哀想だけど、私は関係ないのに。視線に気がついたのか、目が合った彼女は真っ赤な唇をゆがめて笑う。

「ふふ。あなた、自分は関係ないのにどうしてと思っているでしょう？ 関係ないわけないよ。」

ヴィクトルの血を引いているというだけで腹が立つわ。ヴィクトルは私だけのものだったのに。でも、いいの。……あなたを殺して、ロズリーヌもすぐに追い出すから」

楽しそうに笑いながら女性は小さなナイフを取り出した。まさか、ここで殺されるの？ 恐怖で動けないでいると、男性が女性を止めてくれた。

「奥様……馬車の中ではやめてください。血で汚れると掃除が大変なんです」

「そんなの知らないわよ」

「いくらなんでも旦那様にばれたらまずいです」

「……わかったわよ。血が出なきやいいんでしょう？」

何をするのかと思えば、女性は私の髪を切り始めた。一房ずつ掴んで、ナイフで切り落とす。みるみるうちに馬車の床に金色の髪が散らばっていく……

「ふふふ。楽しいわ。みっともない姿ね」

あつという間にすべての髪を切り落とされ、床に重なった髪束を見つめる。侍女達に大事に手入れされていた髪の毛。今の私の姿は見えないけれど、無残なことだろう。

パリリとレースのリボンが落ちた。……ジェラルド兄様からもらった大事なリボン！ 拾おうとしたら、それよりも先に女性に取られた。

「リボンを返して！」

「何よ、このレース。見たことないわ。公爵夫人になったら、これも簡単に手に入るようになるのね」

「返して！」

それだけは返してほしかったのに、女性は鼻で笑った後、そのリボンもナイフで引きちぎる。

「ああ……どうして」

バラバラになって落ちたりボンを慌てて拾い上げる。ナイフで切ったからか、ところどころ引きつってしまつて、綺麗なレースではなくなっていた。

「そんなの持っているなんて生意気なのよ。でも、もう二度とそんなリボンは結べないくらい短くなったわね。似合うわよ」

ナイフを持ったまま女性がにやりと笑う。ああもう、本当に殺されるのかもしれない。そう思ったところで馬車が止まる。

もう一度男性に担がれて降ろされたところは、小さな屋敷だった。

「ここに住むのもあと少しね。本当に長かったわ」

ため息をつくような女性の言葉で、ここが女性の屋敷なのだとわかる。

「お母様！ おかえりなさい！」

はいしいだ子どもの声が聞こえて、そちらに目を向ける。そこには女性にそっくりな黒髪の子どもがいた。

綺麗な緑目の女の子が女性に抱き着く。私と同じくらいの年に見える。

「ただいま、シュゼット。いい子にしていた？」

「ええ。今日はお父様に会いに行つたんじゃないかったの？」

「……ええ。今日の約束はダメになったの。でも、安心していいわ。もう少ししたらお父様と一緒に暮らせるから」

「本当!? お父様と毎日一緒にいられるのね！」

「ええ、だから今日は我慢してね」

「わかったわ！ ……ねえ、ジムが抱えている男の子はどうしたの？」

シュゼットという女の子は担がれている私に気がついたけれど、髪の短さからか男の子だと思つたらしい。じつと見つめられるのが恥ずかしくて目をそらす。

どうしてこの女性も母親なのに、私にこんなひどいことができるんだろう。いつそ、この子に助けを求めたら……？

「……あれ？ でも、ドレスを着てる？ この子は男の子なのにドレスを着てるの？」

「シュゼット、この子はね、頭がおかしいの。どうしようもない悪い子だから、これから罰を受けるのよ」

「ふうん。そうなんだ。早く良い子になるといいね」

悪い子だと聞いて興味がなくなつたのか、女の子は走って屋敷に戻ってしまう。女性はそれを見て満足そうに笑うと、男性に指示を出す。

「それは地下に入れておいて。後で楽しむわ」

「わかりました」

逃げることもできず、隠し扉から地下室に連れていかれる。そこは格子がついた牢のようだった。

「可哀想だが、もう逃げることはできない。あきらめるんだな」

「どうしてこんなことするの？ あの人是谁なの？」

「……そうだな。死ぬ前に教えておいてやるよ。あの方はマゼンタ様だ。イフリア公爵家のヴィクトル様と恋仲で婚約寸前だった。それなのに王命で他の令嬢と結婚することになり、マゼンタ様は伯爵家に嫁がれた」

「伯爵夫人ってこと……？」

「今は未亡人だ。そしてヴィクトル様の愛人でもある」

「愛人……？」

それって、結婚していないのにそばにいる女性のことよね。貴族には結婚した後で本当に好きな人を愛人にすることもあるって聞いたけれど、お父様もそうだったんだ。

本当に好きな人と結婚できなかったのは可哀想だけど、それはお母様もそうだったのに。お母様にも結婚の約束をしていた人がいたって知っている。お互いにつらい思いをしているのだから、お母様と私が責められる話じゃないはずなのに。

「マゼンタ様は望んで愛人でいるわけではない。だから公爵夫人とあなたが邪魔なんだ」

「そんなの私達に関係ないわ」

「まあ、殺されるほうは文句も言いたくなるか」

「あ、ちよっと待って！ まだ聞きたいことが！」

もっとマゼンタとシュゼットについて聞きたかったのに、ジムという大男の足音が遠ざかって

いく。

うす暗い部屋にはベッドと机だけ。奥のほうに手洗い場があったけれど、窓はなかった。

殺されると言っていたけれど、後でマゼンタが来るんだろうか。ベッドの上に座り、ひざを抱える。どうしよう……怖い。それに寒いし、お腹が空いた。

お母様や侍女達は私がいけないことに気がついてくれただろうか。もしかしたら、兄様の治療に時間がかかって、まだ離れに戻ってきていないかもしれない。誰も助けに来てくれなかったらどうしよう。

不安で眠ることもできずに、バラバラにされたリボンを握りしめて、ただ泣いていた。

それからしばらく誰も牢には来なかった。空腹でお腹が痛くなるのを我慢しながら時間が過ぎるのを待つ。

どうして誰も来ないのか、殺すと言ったのは餓死させるつもりだったのか。そんなことをぼんやりと考えていると気が遠くなる。水すらも飲めない状況ではいつまで生きていられるかわからない。このまま死ぬのかなと思ったら、キィと音がした。

「あら、まだ生きていたわ」

「マゼンタ様、何もわざわざ自分で殺さなくても」

「だって、あの女にそっくりなんですもの。それなのに、髪色はヴィクトルと同じなのよ。許せるわけじゃないじゃない……」

「はあ……そうですか」

このままでは殺されてしまう。逃げなきゃと思うのに、身体が動かない。マゼンタが近づいてきた直後、お腹を蹴り上げられる。

「っ!!」

痛い痛い痛い……苦しくて息がでずに転がると、また蹴り上げられる。

「やめ……」

「うるさい！ あんたなんかいらないのよ！」

何度も蹴られ、もうやめてほしいのに声も出せずに耐えるだけ。あまりの痛みで逃げようと転がったら、また腹を蹴り上げられ、血を吐いた。

……ああ、私、死んじゃうんだ。痛いけれど逃げる力はない。踏まれても動くことすらできない。何度も蹴られて飛ばされているうちに握りしめていたリボンもどこかに行ってしまった。ジェラルド兄様……助けて。ここで死にたくない。

「……マゼンタ様、もうやめたほうがいいです。このままここで死んだら魔力が残るかもしれませんが……」

「魔力が残るって何よ？」

「魔力持ちを殺すと魔力っていうものがその場に残るんです。血は水で洗い流せても魔力は流れずに残るそうで、もしここが調べられたら一発でバレます。さすがにそうなれば公爵様でも庇えなくなりますよ」

「じゃあ、どうしろっていうのよ」

「このまま放っておけば死にます。貧民街にでも捨ててきますよ。そうすれば安全ですから」「貧民街ね……わかったわ。でも、ジムが捨てに行つたのが知られたら私が怪しまれるじゃない。他の者に捨てに行かせなさい」

「わかりました。最近雇ったばかりの者に行かせます。顔を覚えられていないでしょうから」

ああ、耳も聞こえなくなってきた。もうジェラルド兄様に会えなくなるんだと思いつつ目を閉じると、そこからは何も覚えていない。

3 大事な人（ジェラルド）

ふと、教師の声に重なって悲鳴のような声が聞こえた気がした。

「どうかしましたか？」

「今、悲鳴が聞こえませんでしたか？」

「悲鳴？」

後ろに控えていた侍従ケインを振り返ると、うなずいて様子を見に行く。何があったのか調べてくるまで授業に戻ろうとしたら、ケインは顔色を変えてすぐに戻ってきた。

「何かあったのか？」

「イフリア公爵家のロズリーヌ様がいらっしゃいました」

「叔母上が？ そんな予定はなかったはずだが」

「はい。今、旦那様と奥様がお会いになっています。何やら緊急事態が起きているようです。事情を聞いてまいりましょうか？」

「……俺も行く。先生、申し訳ありませんが、授業は中断させてください」

「ええ、わかりました」

応接間にいるのかと思えば、まだ玄関を入ったばかりのところで話し合っていた。正確に言えば、泣き叫ぶ叔母上を父上がなんとか落ち着かせようとしている。いつも穏やかに笑っている叔母上に何が起きたというんだ。

「お願いよ、兄様！ 早く、あの子を！」

「落ち着くんだ、ロズリーヌ！」

「ええ、落ち着いてちょうだい。応接室に行つて話をしましょう？」

「そんなことをしている間にあの子が殺されてしまうかもしれないのに！」

あの子つてまさか。それを聞いていても立つてもいられなくなって叔母上の前に出る。

「叔母上！ あの子つて、ジュリアンヌのことですか!？」

「ああ……ジェラルド！ そうよ！ ジュリアンヌがいなくなったの！」

「ジュリアンヌが!? どうしたつていうんですか!？」

少しでも早く話を聞きたくて叔母上に詰め寄ると、父上に止められる。

「ジェラルドまで焦るな。まずはロズリーヌを落ち着かせよう。話はそれからだ」

「……わかりました」

ジュリアンヌに何が起きたのか、気になって仕方ないけれど、目の前にいる叔母上は憔悴しやうすいきつている。落ち着かなければともに話もできないかもしれない。父上は叔母上の手を引いて応接室まで連れていき、侍女に用意させた冷たい水を渡す。叔母上はそれを飲み干すと、また泣き始めた。

「まず、殺されるというのはジュリアンヌのことなんだな？」

「ええ、そうよ！ 昨日からいなくなったの！」

「昨日のいつ、いなくなつたんだ？」

「……昨日の昼、レイモンが熱を出したと言われ、母屋に侍女達と行った時、ジュリアンヌだけは離れに残っていたの。治療を終えて戻ってきた時にはもうどこにもいなくて」

叔母上とジュリアンヌが離れて暮らしていることは聞いていた。前イフリア公爵から嫌われていたため母屋では生活できなかったと。そのこと自体はむしろ良かったと思っていたが。

「すぐにヴィクトルに捜すようにお願いしたのでに捜してもらえなくて。今朝になって急に、ジュリアンヌが行方不明になったのはお前のせいだから責任をとって出ていけと……」

「なんていうことだ。イフリア公爵家では捜索していないのか？」

「誘拐されたなんて知られたら傷物扱いになるからつて。お願い兄様！ あの子を捜して！ 今、ひどい目にあっているかもしれないのよ！」

「わかつた。すぐに捜そう」

絶す望がのような叔母上の願いに父上はうなずいた。なんてことだ。ジュリアンヌが誘拐されたかもし

れないだなんて。助けを呼ぶ声が聞こえた気がして、すぐにでも走り出したくなる。

「ジュリアンヌをさらった者に心当たりはあるのか？」

「ヴィクトルの愛人かもしれないと思って……それを言ったらひどく怒られたの。そのせいで追い出されたのかもしれないわ」

「ヴィクトルの愛人……アジェ伯爵夫人か？」

「ええ、たまに母屋に招かれているのを見たわ。昨日もマゼンタ様の馬車が来ているのを見た侍女がいるの」

「アジェ伯爵家ならすぐに調べられる。手配してくるから、マーガレット、ロズリーヌを頼んだ」

「ええ、ロズリーヌ、あとはラファエルに任せましょう」

「お義姉様……」

また泣き崩れた叔母上を母上が背中をさすって慰める。父上がああ言うのならすぐに調査結果が出ると思うが、ジュリアンヌが無事なのが気になる。俺が捜しに行けばいいのに……十二歳の俺では何もできずに、悔しくて唇を噛んだ。

夜になつても心配で眠れなかった。

ジュリアンヌが悪者に殺されそうになつて泣いている姿を想像してしまう。心配で横になつていられなくて、屋敷から飛び出して捜しに行きたいくらいだった。

落ち着かなくて廊下に出て、玄関から外を見る。捜しに行けるわけもないのに、そうしなくては

いけない気になる。

ふと、門の辺りで誰かが騒いでいるのに気がついた。寝衣姿のまま、玄関から出て門へと駆け寄る。そこでは知らない男が門番と言ひ合いをしていた。

「お願いします！ 旦那様に取り次いでください！」

「お前のような不審な男のためにこんな時間に起こせるわけはないだろう！」

「一刻を争うのです！ このままではお嬢様が死んでしまう！」

「この家にはお嬢様なんていない！」

「違うんです！ ジュリアンヌ様はっ」

「ジュリアンヌだと!?」

ジュリアンヌの名前を聞いて、思わずその男の前に飛び出した。門番が慌てて止めに入るが、そんなことはかまわない。

「え？ ジェラルド様！ 侍従もつけずにどうしてこんなところに！」

「いいから、お前は黙っている！ おい、お前！ ジュリアンヌがどうしたんだ！」

「ああ、お願いします！ ジュリアンヌ様をお助けください！ とても危険な状態で！ 今すぐ治療しなければ死んでしまいます！」

「!! ジュリアンヌはどこにいるんだ！」

「すぐそこに馬車を停めています！」

「どこだ！」

すぐにでもついでいこうとする俺を、門番が慌てて引き留めようとする。

「ジェラルド様！　こんな奴を信用してどこに行こうというのですか！」

「いいから命令だ！　お前もついてこい！　ジュリアンヌを死なせたらお前の命ではつぐなえないぞ！」

「っ!？」

怒鳴りつけた後、かろうじて残っていた理性で、門番が俺を引き留めるのも仕事だと思い直す。こんな夜中に俺が怪しい男についていけば、責められるのは門番だ。

「一人は屋敷の中にこのことを知らせにいけ。二人は俺についてこい。それならいいだろう！」

「はっ！」

夜の門番は六人いる。半分残しておけば問題ないはずだ。

知らせに來た男の後ろについていくと、すぐ近くに粗末な馬車があった。見るからに貴族が使う馬車ではないので、レドアル公爵家の前に停めることを許されなかったらしい。

ドアを開けると血の臭いがした。それがジュリアンヌの血だと気づいて目の前が暗くなる。

……落ち着け、しっかりしろ。どうすれば助けられるか考えるんだ！

汚れた布に包まれたジュリアンヌの小さな身体はぐったりしている。殴られたのか、蹴られたのか、顔や腕にあざがあり、服には血がついている。意識があるのかと顔を見たところ、髪が短くなっていることに気づいた。しかも手当たり次第めちやくちやに切られたのかバラバラだ。

「なんてことを……ジュリアンヌ！　聞こえてるか！」

ジュリアンヌは体温が下がっていて、呼びかけても反応がない。ここでのんびりしている場合ではない。すぐにでも治療を受けさせなければ。

布ごと抱き上げて屋敷へ走って戻る。玄関から入ってすぐにできる限りの大声を上げた。

「父上、母上、どこにいますか！　すぐに治療の手配を！」

その声に反応するように奥から人が出てくる。門番の知らせが届いたのかもしれない。現れたのは父上達だけではなく、叔母上もだった。

「!!　ジュリアンヌ！」

「意識がないんです！　すぐに治療を！」

「ロズリーヌ！　客室を使うんだ！　こっちだ！」

「ええ、早く治療を!!　……ああ、なんてこと……」

一番近い客室のベッドにジュリアンヌを寝かせ、汚れた布を外す。血がついていた服を脱がすと身体のアちこちにあざがあり、特に腹部が真っ青に変色している。

「……なんて、ひどい。あばら骨が折れているし、内臓がやられている可能性が高い……私一人の治療術では足りないわ。兄様、すぐに治療士を用意して！」

「わかった！」

容体を確かめた叔母上がすぐに治療術を開始したが、骨が何本も折れて内臓も損傷しているらしい。数人がかりで治療術を使っても治せるかどうかの瀬戸際。

まだ習い始めたばかりの俺の治療術がどのくらい効くかはわからないが、ないよりはあったほう

がいい。

「叔母上、俺も手伝います！」

大人達の治療の邪魔にならないように、足首にふれて魔力を流す。

頼む……少しでも良くなってくれ。祈るような気持ちで魔力を送る。

ジュリアンヌの整った顔は血の気を失っていて、ピクリとも動かないから人形のように見える。それが恐ろしくて、必死で祈りながら治療を続ける。

父上がレドアル公爵家お抱えの治療士を連れてきても、俺は治療をやめることはできず、ジュリアンヌが助かったと思えるまで、倒れることもいわず全員で治療し続けていた。

次の日の昼過ぎになって、ようやくジュリアンヌの頬に赤みが差してきた。

「ロズリーヌ様、もう大丈夫でしょう。ジュリアンヌ様は危険な状態からは抜けられたと思います」

「……良かった……ジュリアンヌ……っ」

治療士からそう言われて安心した叔母上は、そのまま気を失って倒れてしまった。すぐに隣にいた治療士が支えて、隣の客室へと連れていく。

「ロズリーヌ様は限界を超えていたのでしょう。ジェラルド様もお休みになったほうが良いと思います」

「いや、俺はまだ大丈夫だ。叔母上が起きてくるまでジュリアンヌのそばにいる。目が覚めるまでは身内の魔力を流していたほうが良いだろう」

父上は治療術を使えないこともあって事件の後始末をしているし、母上はこの話が外に流れないように屋敷内の手配をしている。俺はジュリアンヌのそばにいるくらいしかできない。

「それはそうですが、大丈夫でしょうか？」

「このくらいなら平気だ」

「わかりました」

本当は眠いし魔力もきつかったけれど、離れてはいけない気がした。ジュリアンヌの小さな手を握り魔力を流し続け、夜になって起きてきた叔母上と交代する。さすがに限界を超えていたのか俺も気絶するように寝て、起きた後で事件について説明してもらうことになった。

俺と叔母上がジュリアンヌから離れたがらないから、事件の説明は客室で行われた。

「ジェラルドが気づいてくれなかったら、ジュリアンヌは死んでいただろう」

「いえ、あれはたまたまでした」

本当に偶然だったとしか言えないけれど、気づけてよかったと思う。

「あの男は私がアジェ伯爵家に忍び込ませていた者だ。ジュリアンヌのことを知らないか連絡を取ろうとしていたが上手くいかなくて、他の者をアジェ伯爵家に送ろうとしていたところだった。あの男は私と連絡を取れないまま、ジュリアンヌの命の危機だと直接屋敷に連れてきた」

「だから、門番に追い返されそうになっていたんですね」

「ああ、緊急の時にどうすればいいか決めていなかったんだ。送り込んだ時は愛人とイフリア公爵のことを調べるためだけだったから。あの男もまさかジュリアンヌがさらわれてくるとは思わな

かったのだろう」

あの男は門番に追い返されそうになっても必死で食い下がっていた。あそこであきらめたところで、どこの診療所も開いていない時間だ。それにこれだけの傷を負っていたら診療所の治療では助からない。

レドアル公爵家に連れてきたのは父上にとって想定外だったかもしれないが、あの男の判断によってジュリアンヌが助かったとも言える。

「父上、あの男はどうしたんですか？」

「ここにジュリアンヌを連れてきたとバレては困る。どうやらアジェ伯爵家の使用人から貧民街に捨ててこいと命じられたらしい。このまま姿を消したら怪しまれてしまうから、何事もなかったように戻り、何か聞かれたら貧民街に捨ててきたと答えろと言つてある」

「では、またアジェ伯爵家に？」

「今のところはな。これだけの働きをしてくれたんだ。しばらくしたらレドアル公爵家に戻して、他の仕事につかせるつもりだ」

「では、その時は俺の侍従に加えてください」

「ほう。どうしてだ？」

「あの判断力と行動力、それに信頼できそうです」

「そうだな。考えておこう」

父上と話している間もジュリアンヌとは手をつないだまま。身体の治療は済んでも、意識が戻る

のはまだ先だと言われた。死ななかつたのが不思議なくらいの状態だったのだから、完全に治るのにはかなりの時間が必要になる。

頬の傷は治りかけているけれど、目は開きそうにない。頭に巻かれた包帯からはみ出た短い髪が痛々しかった。早く起きて、いつものように笑顔を見せて俺を安心させてくれたらいいのに。

ふと、ジュリアンヌが目覚めた後のことが気になった。叔母上はイフリア公爵家から追い出されたと言っていたけれど、このままレドアル公爵家にいられるんだろうか。

「父上、ジュリアンヌはどうなるのですか？」

「どうなるとは？」

「目覚めた後のことです。まさかイフリア公爵家には戻しませんよね？」

「……ロズリーヌはどうしたいんだ？」

叔母上を見ると、何か覚悟を決めたような顔をしている。

「イフリア公爵家には知らせるの？」

「いや、知らせていない。犯人がアジェ伯爵夫人だということもあって、対応をどうしようか悩んでいる。王命も絡んでいるからな。公爵家だけで処罰を決めることは難しい」

「じゃあ、ジュリアンヌはこのまま見つからなかったことにしてほしいの」

「どういうことだ？」

「イフリア公爵家からは離縁すると言われたわ。ジュリアンヌをきちんと見ていなかった私の責任だ。王命による結婚である以上、私のせいにならないと離縁できないから言い出したのでしょけ

ど。でも、私もそのほうが都合がいいと思うのよ。あのままイフリア公爵家にいたら、またジュリアンヌが危険な目にあうかも」

「そんなこと、許さないぞ！」

「ええ、私もそう思うわ。だから、兄様。お願いよ。離縁した後、ジュリアンヌもレドアル公爵家に入れてくれないかしら」

「ジュリアンヌの籍も入れるとなると、向こうの説得が問題だな」

「でも、今は行方不明だし、おそらく生きていないと思っっているはずよ。私が親権を持って離縁したほうが向こうも助かるんじゃないかしら」

「……イフリア公爵家の籍から外した後でなら、死んで見つかった後もイフリア公爵家は関係なくなる、からか」

「きつとヴィクトルはそう考えるでしょう」

まるでジュリアンヌが死んだほうがいいような言い方だが、娘がいなくなっても捜しもしなかった公爵ならそうかもしれない。叔母上はあきらめたのか冷めた顔をしているが、父上は悔しそうに唇をゆがめた。

「いくら愛人が大事だとはいえ、なんという非道な真似を……王命でなければあんな奴に妹を嫁させることは許さなかったというのに」

「……それはもう言っても仕方ないもの。兄様のせいじゃないわ。離縁とジュリアンヌの籍のこと、向こうとの話し合いを任せてもいい？」

「わかった。二人ともうちで引き取ろう。マーガレット、ジェラルドもそれでいいな？」

「私は大賛成よ。娘をこんな目にあわせても平気な家に戻せるものですか。籍を入れるのなら、私達の養女にしてしましましょう。生きているとわかった後で返せと言われないように」

「ジュリアンヌが俺の妹になるってことですか。賛成です。これからは俺が守ります」

「よし、それではそうしよう。俺の養女として引き取ることにする。ロスリーヌもそれでいいな？」

「ありがとう、兄様、お義姉様。ジェラルド、この子を守ってあげてね」

「はい！」

俺の妹になるのなら、もう二度とこんな目にはあわせない。絶対に俺が守るのだから。

4 新しい自分

ここはどこだろう……暗い部屋の中だ。そういえば知らない女の人に連れてこられて……蹴られて苦しくて。早く逃げなくちゃ、また痛いことをされる。今度こそ殺されてしまうかもしれない。早く、早く……見つからないうちに。

足音が近づいてくる。ヒールの音がこっちに……来る。

「いやっ……いやあああ」

「!!」

「来ないでっ！ 死にたくないっ」

「大丈夫だ！」

「いやっ！ いやよ！ お母様のところに帰して！」

「もう君を傷つける者はいない！ 安心していい！ ジュリアンヌ！」

「……え？」

名前を呼ばれ、ぎゅつと抱きしめられた。温かい腕……ここは暗い部屋じゃない。私は夢を見ていただけ？

「もう大丈夫なんだよ」

「え？ ジェラルド兄様？」

「ああ、そうだよ。安心していいんだ」

「……ここは天国じゃないの？」

まさか私が死ぬ前に神様が最後にジェラルド兄様に会わせてくれた？ そう思ったら、兄様が優しく笑う。

「大丈夫、助かったんだよ」

「助かったの？ 私、生きてる」

私の顔を覗き込もうとした兄様の銀色の髪がさらりと流れ、ハツとする。

「いやっ！ 見ないでっ」

「どうしたんだ？」

ベッドの毛布にもぐり込むようにして頭を隠す。こんな姿、見られなくなかったのに。

「急に動いたら危ない。まだ身体は治り切っていないんだ。それに十日も寝たきりだった」

「……十日？」

「そうだよ。ずっとロズリーヌ様がジュリアンヌの治療をしていたんだが、倒れられたら困るから、今は休んでもらっている」

「お母様が治療を……」

「ああ。どうして急に隠れたんだ？ 俺が怖がらせてしまったのか？」

不安そうな声を聞いて申し訳ないと思っただけ、バラバラに切られてしまった髪を見られるのが嫌だった。ジェラルド兄様にあんなに褒めてもらっていた髪だったのに。それに大事なリボンも切られて、どこかに行ってしまった。思い出したら悲しくて涙が出る。

「ごめんなさい……兄様にもらったリボン、なくしてしまったの」

「そんなこと怒らないよ、大丈夫。顔を見せて？」

「……見られたくないの」

「顔を見られたくない？」

「髪を……切られてしまったから」

ジェラルド兄様が息をのんだのがわかった。こんなみっともなく髪を切られた姿なんて見られたくない。それがジェラルド兄様ならなおさら。

「……そうか。じゃあ、お揃いにすればいいか」

「え？」

何を言っているんだろうと思ったら、席を立つたらしい。少し離れた場所からジャキジャキと何かを切るような音が聞こえる。

毛布のすきまから覗いてみると、兄様は机からハサミを取り出して自分の髪を短く切っていた。手入れが行き届いた綺麗な銀髪が床に落ちていく。

「何をしているの!？」

「髪を切っているんだ。ジュリアンヌとお揃いになれば気にしなくて済むだろう？」

「そんな！ ジェラルド兄様が切る必要なんてないのに！」

「でも、こうでもしないと顔を見せてくれないだろう？」

私と同じようにバラバラに髪を切った姿でにつこりと笑う。あまりのことに何も言えない。私のせいでこんな風に髪を切らせてしまうなんて。

「あらあら。何が起きたのかしら」

いつの間にかドアを開けて誰かが来たらしい。この姿を見られないように、またベッドの中にもぐり込んだ。

「ああ、母上。ジュリアンヌが目覚めました」

「よかったわ。ところで、ジェラルドのその髪はどうしたの？」

部屋に入ってきたのは伯母様だった。大好きな伯母様だけど、今は顔を出せない。

「ジュリアンヌが髪を見られたくないと言うので、俺もお揃いにすれば気にならないかと思いま

した」

「まあ。……それはそうね、見られたくはないわよね。じゃあ、ジュリアンヌのお世話はジェラルドにお願いするわ」

「もちろんです。そのつもりでしたから」

「それならいいわ。あとは任せました。ジュリアンヌ、何かあればジェラルドに言うといいわ」

「……伯母様、ごめんなさい」

「ジュリアンヌは何も悪くないのよ。元気になったら可愛い顔を見せてちょうだいね」

「……はい」

顔を見せて大丈夫だと言えば安心してもらえるのはわかっていたけれど、毛布から出る勇氣はなかった。そのまま黙っていると足音が遠ざかって、ドアが閉まる音がした。

「もう出てきてもいいよ。ここには俺しかいないから」

「……」

見られるのは嫌だったけれど、私のために髪を切ってくれたジェラルド兄様を拒否することはできず、おそるおそる顔を出した。

「うん、いい子だ。まずは水分をとろうか」

「……」

言われてみれば喉がすごく渴いている。

手渡されたグラスを受け取ると、レモンと蜂蜜が入った水だった。わざと冷たくしていないのか、

ごくごく飲める。

「それを飲んだらまた横になろう。まだ身体は回復していないんだ」

「……どのくらいで回復するの？」

「日常生活に戻るまでは三か月くらいかかると治癒士が言っていたな。骨が折れていたし内臓も損傷していた。無理はせず、ゆっくり休めばいい」

横になると、ジェラルド兄様が手をつないでくれる。温かさが伝わってきて緊張が解けていく。もう怖がらなくてもいいって言われているみたいなのがする。

「もう大丈夫だ。何かあれば俺に言つて。ずっと一緒にいるから」

「うん……」

本当に甘えていいのかなと思ったのをさとられたのか、真面目な顔で言われてうなずくしかない。

顔を見られたくはなかったけれど、一人になるのも怖かった。目を閉じたら、またあの女の人が襲つてきそうで、あの痛みを思い出してしまうのが怖くて仕方ない。

大丈夫、そう言いながら肩を撫でてくれる手が心地よくて、気がついたら眠りに落ちていた。

それからはいつ目覚めてもそばにはジェラルド兄様がいたから、眠るのが怖いと思うこともなくなった。三か月が過ぎた頃、ようやく立って歩けるまで回復できた。

ようやく普通に過ごせるようになった頃、伯母様が編んでくれたレースの帽子をジェラルド兄様

とお揃いにかぶることで、屋敷の中では家族や使用人と会えるくらいにまで気持ちも落ち着いてきた。

それまではジェラルド兄様とお母様にしか会うことができなかった。特に黒髪の女性と身体の大きな男性が怖くて、その特徴を持つ使用人は申し訳ないけれど、私に関わらない仕事に配属を変えてもらうことになった。

ジェラルド兄様はバラバラだった髪を切って整えたせいでかなり短くなってしまったのに、そのままの姿で気にしていないようだ。

私のせいで切らせてしまったと後悔して、後でしっかり謝ったけど、ジェラルド兄様はお揃いだねと笑うばかりだった。

私が行方不明ということは王家とイフリア公爵家、レドアル公爵家だけが知り、表向きには重篤な病気になるってレドアル公爵家に引き取られたことになっている。王家との話し合いが必要になったのは、第二王子サミュエル様と婚約の話が進んでいたから。

私がさらわれた責任をお母様にとらせるとお父様が言っていたのは、私がただの公爵令嬢ではなく、王子の婚約者候補だったからだ。王子の婚約者候補である私をきちんと守れなかった責任をとって、お母様はイフリア公爵家から離縁されていた。

私が行方不明になった次の日にお母様が追い出されたのは、王家から責められる前にすべてお母様のせいにしたかったかららしい。

元からお父様にはあまり好かれていないとわかっていた。でも、それを聞いてお父様にとって大

事なのはレイモン兄様だけで、私とお母様はどうでもよかったのだと思い知らされた。

王家とお父様との話し合いを終えて帰ってきた伯父様は怒っていたけれど、お母様と私をレドアル公爵家に引き取り、第二王子の婚約の話もなくなしてくれていた。

ついでに王命による結婚が不幸な結果に終わったことを大げさに嘆いて、ジェラルド兄様に来ていた第一王女アデル様との婚約の話も断つたのだとか。さすがにそれには驚いて、本当に大丈夫なのか確認してしまった。

「ねえ、アデル王女との婚約を断って大丈夫だったの？」

「もともと王女の降嫁は断るつもりだったんだよ。その理由がなくて困っていたから、父上は今回のことを利用したんだ。王家にとつてジュリアンヌの件はよほど公表されると困るらしい」

「公表されるとイフリア公爵家とレドアル公爵家の不仲が知られるから？」

「不仲が知られるからというよりも、王命を出した結果、愛人が娘をさらうだなんて。そんなことになったのは無理やり結婚させたからだと貴族達は思うだろう」

「王家はそのことを知っているの？」

「うすすね、確証はないだろうけど」

聞けば、お父様に愛人がいるのは結婚当初から有名な話だったらしい。それなのに王命で結婚させたのだから、お父様もお母様も可哀想だと思われていた。それでもレイモン兄様と私が生まれたことでこの結婚は成功だったと思われていたのに、事件を起こしたとなればまた批判される。王家はそれを恐れて事件をなかったことにしたいそうだ。

「ジュリアンヌの件を公表しないことと引き換えに、ロズリーヌを離縁させてレドアル公爵家に戻すと約束させてきたけど、ジュリアンヌもそれで良かったかい？」

「ありがとう、伯父様。あの家に帰らなくていいならうれしい」

「それならいいが。ただ、そのせいであの女を処罰するのは難しくなってしまった。……悔しいな」

「それは……今でも許せないけれど、それでも正式に調べて罰することになったら、私が生きていると知られてしまうかもしれない。そうしたらイフリア公爵家に戻されてしまうかもしれないし、これでよかったんだと思うの」

「そうか」

どうやら伯父様が陛下とお父様と話し合って決めてきたことに、私が納得していないのではないかと心配していたらしい。たしかに悔しい気持ちはある。お父様の愛人を罰してほしいとも思いうけれど、それよりも今の穏やかな生活を守りたい。私が死んだと考えているお父様は私を捜そうともしない。そんな人のところには絶対に戻りたくなかった。

「ただなあ、第二王子を納得させるのが大変だったよ」

「え？」

「ジュリアンヌは行方不明だと聞かされたようで、捜しに行くと泣いて暴れて大変だった」

「第二王子が？ どうして……あんなに私を嫌っていたのに」

「それは……王子の気持ちはわからないが、最終的にはジュリアンヌは亡くなったんだと言われて

大泣きしていた」

「そうですか」

嫌いな人でも死んだと言われたら悲しくなることもあるのかもしれない。不思議に思っていると、ジェラルド兄様に頬を撫でられた。

「大丈夫か？ 何か嫌なことがあればすぐに言えばよ」

「うん、ありがとう」

ジェラルド兄様は、私が短くなった髪を気にしていると知っているから、何かある時は頭ではなく頬を撫でてくる。それがくすぐったくて、でもうれしくて、もっとしてほしくなる。

あと一年もすればジェラルド兄様は学園に通い始める。そうなればこんな風に一日中一緒にいることは難しくなる。

甘えていられるのも今だけだから許してほしい。

そんな気持ちで過ごしていたある日、お母様が倒れてしまった。診断結果は治療術の使いすぎだった……

あの時、レイモン兄様へ治療術を使っただけだったのに、私が目覚めるまでの十日間、限界を超えて治療術を使っただけの原因だった。

お母様は自分の体調が悪いのもわかっていたのに、私を回復させることを優先して、三か月以上も黙っていた。そのせいで気がついた時にはもう手遅れになってしまっていた。お母様は倒れた日

から起き上がることもできず、部屋で寝たきりになってしまった。

最初は会話もできていたのに、日に日に弱っていく、ひと月も経つ頃にはずっと眠り続けるようになっていった。

治療士の説明によると、治療術を使いすぎて、お母様は魔力の器が壊れてしまっている状態だそう。だから、魔力による治療術を使おうとしても、器から魔力が流れ出てしまうために効果がない。

公爵家お抱えの治療士でも、身内であるジェラルド兄様の治療術でも、まったく回復しなかった。魔力持ちの身体は魔力があつてはじめて維持できるようになっているため、その魔力を保持できなくなったお母様は、もう治る見込みはないという……

「どうしたら……どうしたらお母様は助かるの？」

「……今の状態だと、何をしても無理だと」

「そんな！」

「器を治す方法は見つかっていない」

「……私を治そうとしたからお母様は……私のせいだわ」

私を助けようとしなければ、お母様が倒れることもなかったのに。そう思ったら悲しくて悔しくて涙がこぼれた。

「ジュリアンヌ、それは違う。いろんなことが重なったせいでもあるんだ。レイモンの病気とジュリアンヌの怪我、どちらかならきつと壊れなかった」